

## 倫理学における判断力の問題 (続)

— 物語と判断力の関係を中心に —

八 幡 英 幸

### An Introductory Study of the Problems of Judgment in Ethics (2): On the Relation between Narrative and the Power of Judgment

Hideyuki YAHATA

(Received October 3, 2011)

The aim of this paper is to reconsider the relation between narrative and the power of judgment in Kant's sense, among which has been pointed out to be a close relationship. The results of this study are as follows: on one hand, diverse studies on narrative theory have reached agreement on these points: (1) in narrative is found the connection between two different kinds of orders (i. e. the chronological one and the non-chronological one); (2) the formation or reformation of narrative is set off by some contingent elements or the lack of connection between them; (3) narrative enables our self-understanding and gives the foundation of personal identity. On the other hand, the power of judgment in Kant's sense has these characteristics: (1) it mediates between two different kinds of orders (i. e. the one of nature and the one of freedom) in the same field of experience; (2) it subsumes some contingent elements under a new order; (3) it is led by a sort of feeling of pleasure; (4) it has a foundation on our bodily nature; (5) it contains two different viewpoints (i. e. the one of human limited understanding and the one of another kind of understanding). As a conclusion, narrative and the power of judgment have come out to have in fact many similarities. The above points (1) and (2) are obviously, also the other points are in fact thought to be applicable to both these activities.

**Key words :** narrative, power of judgment, two different kinds of orders, contingent elements, self-understanding, feeling of pleasure, our bodily nature, two different viewpoints

#### 1. 問題設定

私は昨年、本紀要に発表した論文「倫理学における判断力の問題 (序説): 普遍化可能性と特殊性」の冒頭で、普遍化可能性 Universalizability の原理 (20 世紀のカント主義的功利主義者, R. M. ヘアによって明確に定式化され、多くの議論を呼んできたメタ倫理学上の原理) に内在する課題に触れ、次のように研究の見通しを述べた。

「結局のところ、根底にある問題は、何を「特殊な状況」と考え、特別な配慮の対象とするか (逆に言えば、何を「類似の状況」として一括し、共通の指令の下に置くか) であるが、このことに関する基準を立てるのは非常に難しい。これはいわば、状況の特性記述 specification の問題である。本稿ではさらに、このことは、カントが道徳の基礎づけとは別に、『判断力批判』(1790) で主題化した反省的判断力の問題に重なることを示したい。カントの言う反省的判断力については、P. リクールらが現代の物語論 narrative theory との関連を指摘している。また、共同体主義者が、「私」というものの意味を「誕生から死までを貫くある物語の主体であるということ」(A. マッキンタイア) に求めていることを想起すれば、倫理学上の普遍主義に関係する以上のような問題と判断力、そして物語論との関連が見えてくるはずである。」<sup>1</sup>

前稿で、普遍化可能性と判断力 (反省的判断力を含む、以下同様) の関係はそれなりに明らかにできたと思う。要するに、判断力が欠けているとすれば、何が「類似の状況」で、何が「特殊な状況」かが判別できないため、

普遍化可能性の原理は機能しないのである。倫理学上の普遍主義（少なくとも、普遍化可能性をその根底に置く立場）は、判断力なしには成り立たない——このことはまず間違いない。

ところが、反省的判断力については、上に引用したように物語論との関連が指摘されている。また、物語論は、一般に普遍主義と対立するものと考えられている共同体主義との関係が深い。だとすれば、カントの言う判断力は、倫理学上の普遍主義を支える一方で、物語論、共同体主義にも関係するという微妙な位置を占めていることになる。だが、前稿では、上に引用したような大きな問題設定をしながら、実際には、判断力と物語論の関係についての検討には踏み込めなかった。

本稿では、この欠を埋めるため、以下のような作業を行いたいと思う。まず最初に、物語論の代表的な論点をまとめた文献から、物語の成立条件にはどのようなものがあり、また、物語は私たち人間にとってどのような意義を持つのかをまとめる（2. 物語論の視点）。ここで取り扱う文献の中には、広く言語表象を取り扱うもの、歴史の哲学を意図したもの、それらを包括する哲学を意図したものが含まれる。次に、物語はなぜ判断力と結びつけられるのかを、そのように主張する物語論の文献と、カントのテキスト（主に『判断力批判』）の検討を通じて明らかにしたい（3. 判断力論との関係）。そして、最後に、このように物語論と判断力論の関係を検討した結果、何が見えてきたかをまとめる（4. 小括と展望）。

## 2. 物語論の視点

### 2-1. 時間の秩序と組織の秩序

ここではまず、ある物語論の入門書（ジャン＝ミシェル・アダン『物語論：プロップからエーコまで』末松壽・佐藤正年訳、文庫クセジュ、2004年）を取り上げ、そこでは何が物語成立の条件とされているかを見ておくことにしよう。なお、この文献の特徴として、それが言語学者によるものであること、また、そこに登場する物語の例が、民話、文学、聖書、マンガ、公告、小学生の作文、日常会話と、非常に広範囲から採られていることがある。つまり、この文献は、物語論の中でも、広く言語表象の中からその名に値するものを取り出すことを意図したものとすることができ、それゆえ本稿の目的（特定のジャンルの物語にこだわるわけではない）にふさわしいと思われる。

さて、アダンは上記の入門書で、諸説を検討した上で、「それが物語だと言いうるためには、以下の六つの構成要素が集まっていなければならない」<sup>2</sup>と結論づける。

- (A) 諸事件の継起。「継起のないところには物語は存在しない」(C. プレモン)。
- (B) テーマの単一性（少なくとも一人の演技者としての主体S）。「人間的興味を含まないところには (...)、物語はありえない」(C. プレモン)。
- (C) 変換される述語。「t時に状態の主体Sを性格づけていた(...)述語が、t + n時にどうなるかが言われること」(C. プレモン)。
- (D) 事行。「同一行為〔筋〕の単一性への統合のないところには、物語はない」(C. プレモン)。
- (E) 物語の因果関係。「物語は説明し跡づけると同時に秩序づける。それは年代上の連鎖に換えて因果の秩序を置く」(J. P. サルトル)。
- (F) 最後の評価（教訓）。「すべての事実が明らかになったとしてもなお、事実を連続として見るのではなく、それらを同時に把握するにいたる判断行為における理解の問題は残る」(L. O. ミンク)。

この六つの構成要素が持つ意味は、最後の(F)に付された引用から考えるとわかりやすいと思われる。すなわち、物語の語り手、聞き手（あるいは書き手、読み手）に求められることとして、最終的には、「事実を連続として見るのではなく、それらを同時に把握する」ということがある。ここには、大きく言えば二つの課題が含まれ、(A)～(F)の構成要素はこの二つの課題に関係づけられる。

一つ目の課題は、まず「事実を連続として見る」ということである。これは、詳しく言えば、(A)「諸事件の継起」として、(B)ある「主体S」（これは人間とは限らない。例えば、国家が主体となる場合もある）を特徴づける述語が、(C)「t時」から「t + n時」へとどのように変化したかを辿るということである（ここにはもちろん、知覚の信頼性、「主体S」の同一性など、いくつもの認識論的課題が潜んでいる）。アダンの表現を用いて

言え、これは「時間の秩序」を表象するということである。

二つ目の課題は、事実を「同時に把握する」ということである。これは、詳しく言えば、諸事件の継起の中に、(D)「同一行為〔筋〕の単一性への統合」として、(E)「因果の秩序」（後述するように、ここには目的論的因果性が含まれる）を見出し、(F)そこに「最後の評価（教訓）」（明示的なものでないとしても）を付与するということである。このような側面があるために、物語（わかりやすい例として、イソップの寓話や偉人の伝記を思い浮かべるとよい。前者は虚構であるが、後者は（必ずしも）そうではないことにも注意）は単なる事実の報告や年代記とは異なるものになる。アダンの表現を用いて言えば、これは「組織の秩序」を表象するということである。ここではさらに、物語がこの両面（「時間の秩序」と「組織の秩序」）を持つということをわかりやすくまとめた箇所を引用しておこう。

「言語学者ルイス O. ミンクが明らかにしたように、どれほどささやかな物語であっても、それは必ず事件の時間的な連続以上のものである。物語る活動は時間の秩序と組織の秩序とを結合している。一つの話の展開（時間の秩序）をたどることはすでに、そこに起こる諸事件を反省的な判断行為によって一つの有意味の全体（組織の秩序）として見通すために、それらの事件について考えることである。」<sup>3</sup>

ここでは、この二つの秩序のうち、特に「組織の秩序」を見出すことが「反省的な判断行為」と呼ばれていることも記憶にとどめておきたい。

## 2-2. 欠落あるいは偶然的要素

だが、前節での要約は、いささか秩序の面に力点を置きすぎた感がある。確かに一方では、「物語の読み手ないし聞き手は、つねに命題相互間にこのような整合性を築こうと」<sup>4</sup>するものであり、書き手ないし語り手は、最終的には、前節で述べたような諸要素を織り込んで物語を書く、あるいは語るよう導かれるのは事実であろう。読み手ないし聞き手の、「どうして?」、「それから?」という問いかけに答えるようにして、しかし、その一方で、物語の語り手と聞き手、あるいは書き手と読み手のあいだにそのような応答が生じるのは、整合性の不足を感じさせ、秩序化への欲求を呼び覚ますような「欠落」がそこにあるからである。アダンは前掲書で、そのような「欠落」を抱えた「最小限の物語」の例をいくつか示し、このことを示唆している。

「子供が泣いた。パパは彼を腕に抱いた。」<sup>5</sup>

「子供が泣いた。パパは『構造人類学』と『存在と無』とを手にとった。」<sup>6</sup>

このどちらの場合にも、二つの命題のあいだのつながりや、これに何が続くかは示されていない。そこで、聞き手あるいは読み手は、「どうして?」、「それから?」と問いかけたくなる。前者の場合には、これに対する応答として、「いつも彼は、妻がいない時、子供をあやすためにそうしていたからだ。この日も、彼の腕に抱かれるとすぐに、子供は泣きやんだ。」といった叙述が行われるかもしれない。これに対し、後者の場合には、どのような叙述がこれに続くかはおよそ予想しがたい。アダンの言葉を借りて言えば、そこには「もっと大きな不確実性」<sup>7</sup>がある。だが、そうであるがゆえに、私たちはその再構築を求め、このような物語の世界へと引き込まれていくのである。

ここでは次に、貫成人『歴史の哲学：物語を超えて』（勁草書房、2010年）から、物語とは何かについて簡潔にまとめた箇所を参照しておくことにしよう。この文献には、歴史学の方法論を意識することから生じたと思われる定義の窮屈さ（特に、他のジャンルの物語にとっては過度に思われる首尾一貫性の強調）も見られる。だが、その一方で、アダンの言う「不確実性」に対応する、「偶然的要素」や「雑多・多様なもの」への言及が見られる。例えば、「それまでの経緯からすれば唐突で偶然的な要素も、結末を導くうえで必要であれば、物語において許容される」<sup>8</sup>、「中心主題に関する帰結を導くために必要なら、いかに雑多・多様なものでも物語に登場しうる」<sup>9</sup>といった具合である。同書では、このような点も含め、物語（としての歴史）は次のように位置づけられる。

「こうして物語とは、単なる出来事や行為記述の連鎖ではなく、最低、つぎの条件を満たすようにその要素が選択され、配列されたテキストであることになる。第一に、各項はそれに先立つ項から導かれ、あるいは、唐突

に出現した項もそれ以前の項との首尾一貫性を保ちつつ、後続の項を導くために必要でなければならない。第二に、結末は、当初の設定などからただちに演繹、予言され、はじめから見えてしまっただけではなく、逆に、最後にあらわれる「機械仕掛けの神」によってすべてが解決してしまうようなストーリーもで可い悪い物語である。いづれも、途中の、また先行する要素の必要を一気に奪うからだ。第三に、ひとつのストーリーには、何らかの仕方で結末を導くという目的に照らして不要な項が含まれてはならない。(…)帰結に向かって目的論的に進み、その過程で異質なカテゴリーに属するものを統合し、受容可能性が保たれる限りにおいて時系列の逆進や交叉を許容するのが物語(筋)である。」<sup>10</sup>

ここでは、物語が、「唐突に出現した項」もその中に統合しつつ、その結末へと向かう目的論的な秩序を持つものと考えられている点、とはいえ、結末さえあればよいというわけではなく、途中のどの項も不可欠なものとして、その秩序全体に結びつけられるという点などを記憶にとどめておきたい。これらの点は、『判断力批判』で論じられる自然の有機的産物の特質によく似ている。

### 2-3. 私の物語と物語的自己同一性

それでは、ここまで見てきたような特質を持つ物語は、私たち人間にとってどのような意味を持つものなのだろうか。ここでは特に、歴史記述のような大きな物語ではなく、個々人の生い立ちや人生の物語の意味を考えていきたい。ここではそのために、最近『死生学研究』(14号、2010年12月)に発表された論文、竹村初美「祖先・私・子孫をつなぐピコ(へその緒)の名:現代ハワイ先住民による自己の再帰的プロジェクト」を参照しておこう。竹村は、この論文で、B. アンダーソンの『想像の共同体』(原著初版1983年、改訂版1991年)から次のような箇所を紹介し(引用の前半)、個人の自己同一性(アイデンティティ)に関わる「私の物語」の創出について論じている(引用の後半)。

「幼児から大人になるまで、何千の日々が思い出のあなたに消え去ってしまうことか! 黄ばんだ写真の中で毛布やベッドの上で幸せそうに寝そべっているこの裸の赤ん坊があなただということを知るのに他の人の助けがいるというのはなんと奇妙なことか。写真、つまり、この複製技術時代の申し子は、事実記録の膨大な近代的蓄積(出生証明書、日記、成績通知表、書簡、診療記録、その他)のなかでもっとも有無を言わさないものであるにすぎず、こうしたものが同時に、なんらかの外見的連続性を記録し、それが記憶から失われたことを強調する。この疎外から人物(パーソンフッド)、アイデンティティ(そう、あなたとあの裸の赤ん坊は同一人物なのだ)の概念が生まれ、そしてそれが「記憶」されえないものであってみれば、語られるほかない。」<sup>11</sup>

「《私》のなりたちを知ろうにも、《私》は自分の過去から疎外されている。《私》と記憶されえないものとの間には断絶がある。(…)物語とは、まさにその忘却から生まれるものだ。断絶の自覚が、物語を創出するのである。」<sup>12</sup>

ここでも、「欠落」によく似たキーワード「断絶」が登場する。「私」と自分の過去とをつなぐ記憶の「欠落」、それが生む「断絶」を契機として「私の物語」が創出される。また、アンダーソンからの引用で見落とされてはならないのは、「黄ばんだ写真の中で毛布やベッドの上で幸せそうに寝そべっているこの裸の赤ん坊があなただということを知るのに他の人の助けがいるというのはなんと奇妙なことか。」という一文である。この一文は、個人の自己同一性に関わる「私の物語」が創出される際には、他者との相互作用がなくてはならないということを示唆している。前項で見たような、物語の語り手と聞き手、あるいは書き手と読み手のあいだの応答は、「私の物語」の場合にも重要なのである。

ここではさらに、以上のような見方が、アンダーソンの上記著作と同時期に刊行が開始されたP. リクルの大作『時間と物語』(原著1983年～1985年)において、もっと哲学的な主張として展開されていることを見ておきたい。すなわち、リクルは次のように述べ、哲学者たちを悩ませてきた人格の同一性の問題は、「物語的自己同一性」の観点からしか解決できないと主張する。

「個人または共同体の自己同一性を言うことは、この行為をしたのはだれか、だれがその行為者か、張本人か、の問いに答えるものである。まず、だれかを名ざすことによって、つまり固有名詞でその人を指名することによって、その問いに答える。しかし固有名詞の不変性を支えるものは何か。こうしてその名で指名される行為主体を、

誕生から死まで伸びている生涯にわたってずっと同一人物であるとみなすのを正当化するものは何か。その答えは物語的でしかあり得ない。「だれ？」という問いに答えることは、ハンナ・アーレントが力をこめてそう言ったように、人生物語を物語ることである。物語は行為のだれを語る。〈だれ〉の自己同一性はそれゆえ、それ自体物語的自己同一性にほかならない。語りの助けなしには、実際のところ、個人の自己同一性の問題は、解決なき撞着に陥る運命にある。」<sup>13</sup>

リクールはさらに、「物語的自己同一性は、安定した、首尾一貫した同一性ではない」。「同じ偶然的な出来事についていくつかの筋を創作することが可能なように、自分の人生についてもいろいろ違った、あまつさえ対立する筋を織り上げることも可能なのである。（…）物語的自己同一性はたえずつくられたり、こわされたりし続ける。」<sup>14</sup>とも述べている。このような不確実性は、「私の物語」が、記憶の「欠落」やそれが生む「断絶」を契機として創出されるものである以上、排除されえないものであろう。

### 3. 判断力論との関係

#### 3-1. 物語と判断力 —— 物語論の視点から

さて、前節で見てきたような物語論の視点は、カント哲学の一般的イメージ——自然と自由の両面における法則定立へのこだわりや、例外を許さない義務の教説の厳格さ（歴史構想や人間学講義を考慮に入れると、また別の側面があることがわかってくるのだが）——とは対極にある印象を受けるかもしれない。ところが、問題設定の際にも述べたように、物語論の視点は、カントの言う意味での判断力、特に反省的判断力との深いつながりを持つと言われる。ここではまず、このような見方を示した文献をいくつか紹介しておくことにしよう。最初に引用するのは、このような見方が広く知られるようになる上で、非常に大きな影響を与えたと思われるリクールの前掲書の一節である。

「年代順的次元は物語のエピソード的次元をなす。つまりそれは出来事から成るものとしての話の特徴づける。第二の非年代順的次元は、本来的に統合形象化的次元であり、それによって筋は出来事を話に変形する。この統合形象化する行為は、細部の行動、あるいはわれわれが話の小事件と呼んだものを「統握する」ことにある。それは出来事のこの多様性から時間的全体の統一性を引き出す。統合形象化する行為に固有のこの「統握する」とと、カントのいわゆる判断力の操作との類縁性をいくら強調してもしすぎることはないだろう。」<sup>15</sup>

リクールの言う「年代順的次元」と「非年代順的次元」はそれぞれ、前節で紹介したアダンの言う「時間の秩序」と「組織の秩序」に対応するものと考えてよいだろう。また、アダンはこの二つの秩序のうち後者、つまり「組織の秩序」を見出すことを「反省的な判断行為」と呼んでいたが、リクールもまた後者の次元、つまり「非年代順的次元」に関わるものとして判断力を位置づけている。

具体的には、「統合形象化 configuration」、「統握 pendre-ensemble」、そして「出来事のこの多様性から時間的全体の統一性を引き出す」ことなどが、カントの言う意味での判断力の機能とされる。ただし、この場合、判断力の中心的機能は、一般にはむしろ構想力に帰せられることが多い「形象化」に求められていることに注意する必要がある。このことは、物語と判断力との関係に言及する文献にしばしば見られる特徴である。次の引用は、前節でも参照した貫成人の著作からのものであるが、リクールの著作の参照箇所（以下の引用では省略）を多数示しながら書かれたこの箇所（前稿でも参照）には、このような特徴がもっと明瞭に表われている。

「カントの言う「反省的判断」は、当該現象の諸側面をふまえて全体を把握し、新たな規則、新たな個別的因果関係を生み出す能力であり、その母胎となるのが「生産的構想力」による「図式化」である。物語の進行を支える自明の理や全体のプロットは、カントの意味での反省的判断力によって選択され、確立される。」<sup>16</sup>

このような見方は、カントの判断力論の現代的意義を考える上でたしかに重要である。本稿も、このような見方があることを一つの手がかりとして、物語と判断力との関係を再考しようとするものである。だが、一つの疑問として、この両者の関係は、「統合形象化」、「統握」、「図式化」といった、表象能力としての判断力の機能に即

して語られるだけでは不十分なのではないかというものがある。両者のあいだには、そのような「筋立て」に関わる機能が、判断力、特にその反省的側面に認められるということ以外にも、もっと重要な関連があるのではないだろうか。

そのように思われる理由はいくつかある。まず、第一に、『判断力批判』は、カントの哲学体系の中で、自然と自由、自然哲学と実践哲学の架橋という重要課題の解決を託された著作であり、そこに登場したのが反省的判断力であったということがある。表象能力としての判断力の機能も重要であるが、このような体系上の位置づけにも配慮した考察が必要である。また、第二に、物語にとって重要な契機として「偶然的要素」（前節で参照した文献では、「欠落」、「不確実性」、「断絶」といった言葉で表現されていた）があるが、そのような偶然性は判断力にとっても根本的に重要な意味を持つ。というのも、カントにより、判断力の原理とされる合目的性は、事物の偶然性との深いつながりを持つものとして位置づけられているからである。以下では、このような原理的側面からも考察をすすめていくことにしよう。

### 3-2. 判断力と物語 ——『判断力批判』から

カントは『判断力批判』（1790）の序論の冒頭で、哲学の二大領域と、それを架橋するものとしての判断力という上述の見通しを示している。まず、自然哲学と実践哲学がそれぞれ独立の「領域 Gebiet」を持つというのは、そのいずれについても固有の概念（自然概念と自由概念）があり、それぞれに固有の法則（自然法則と道徳法則）を定立する働き（悟性と理性）が存在するということである。このことから、悟性と理性は「経験という同一の場 Feld」<sup>17</sup>で働くのではあるが、その二つの「領域」のあいだには「見渡しがたい裂け目が厳然と存在」<sup>18</sup>する、とカントは言う。

ところが、判断力は、「特殊なものを普遍的なものの下に含まれているものとして考える能力」<sup>19</sup>である。ここで、「普遍的なもの das Allgemeine」とは、自然法則および道徳法則、あるいはそれらに関係する概念（例えば、物体、人格など）のことであり、これらは上述の通り、悟性や理性により、それぞれ固有の領域から供給される。他方、「特殊なもの das Besondere」とは、さまざまな経験の場において与えられる対象（多様な自然現象、社会事象など）のことであり、以上をまとめると、判断力は、それ自体としては互いに異質な、自然および自由に関する概念や法則（これらは反省的判断力により新たに見出されなければならない場合もある）を、「経験という同一の場」で諸対象と結びつけることにより、両者を架橋するのだと考えられる。

ここで想起されるのは、アダムの言う「時間の秩序」と「組織の秩序」、あるいはリクールの言う「年代順的次元」と「非年代順的次元」が、物語の成立過程において結合されるという主張である。このような主張は、「経験という同一の場」において自然概念と自由概念が架橋されるというカントの見方とよく似ている。ただし、物語論においては、判断力はその一方の秩序、つまり「組織の秩序」あるいは「非年代順的次元」に関わるものとして位置づけられていたのに対し、カントの場合、判断力は、悟性と理性、自然概念と自由概念のどちらにもかたよらずに機能する媒介者＝中間項として位置づけられているという違いがある。

ここではさらに、カントが判断力の原理とする「合目的性」（正確には、「自然の形式的合目的性」が「判断力の超越論的原理」とされる）についても見ていくことにしよう。この原理は、いまだ普遍的な自然法則に関係づけられないまま、いわば不可解なものとして残されている自然の事物やその諸形態についても、「あたかもある悟性が、自然の経験的諸法則という多様なものを統一する根拠を含んでいるかのよう」<sup>20</sup>に考え、そこに新たな法則や概念が見出されることを期待しながら、探究を継続するよううながすものである。この原理についても、物語論の視点とのつながりが指摘できる。まず、「ある悟性」が「多様なものを統一する根拠を含んでいるかのよう」<sup>20</sup>というのは、物語にはその語り手、あるいは書き手が存在するように、自然にも悟性（概念の能力）を持つ作者がいるかのように考えるということである。また、物語の成立においてそうであったように、ここで主に想定されている自然探究の場面においても、探究の契機となる「偶然的要素」は、最終的にはある種の合目的的な秩序へと結びつけられる。カントはこのことを次のように説明している。

「その特殊な諸法則の多様性という点での自然が、そのために諸原理の普遍性を見出そうとするわれわれの必要性和このように合致することは、われわれのすべての洞察をもってしても偶然的であると判定せざるを得ない。だが、にもかかわらず、この合致は、われわれの悟性の必要にとって不可欠なものとして、それゆえ合目的なものとして判定されねばならない。この合目的性によって自然は、われわれの意図、しかし認識にのみ向けられた意図と合致するのである。」<sup>21</sup>

例えば、何かある植物の葉のつき方や、枝別れの仕方が、ある一つの数式（フィボナッチ数列）に従っていることがわかったと、多くの人は最初、それは偶々、つまり偶然そうになっているにすぎないのではないかと考えるに違いない。だが、このような「偶然」がくり返し多くの動植物の形態、さらには物体の運動にも見出されるとなると、さらにその理由を探究せずにはいられなくなるだろう。つまり、このような「偶然」は、自然の認識をさらに推し進めるという目的に貢献するものとして、ある種の「合目的性」を持つに至るのである。そして、この合目的性は、次のように独特の喜び、快の感情を私たちに与える。

「二つないしそれ以上の数の異質な経験的自然法則が、この両者を包括する一つの原理のもとで合一されうることが発見されると、このことはきわめて著しい快の根拠となる。」<sup>22</sup>

『判断力批判』の序論ではまず、このような表象能力の運動から生じる快は、自然探究の過程で生じ、それを導くものとされる。だが、これに類似した、しかしより純粋な形の快は、私たちが客体の認識（概念化）という関心さえも離れ、美しいものに相対する時に生じるとされる。そして、このような快の感情は、それ自体は個人の主観に与えられるものでありながら、その普遍的伝達可能性、必然性についての主張を生み出す。すなわち、「これは美しい」という判断が下されるに至るのである。このようなことは『判断力批判』の第一部で明らかにされる。他方、物語についても、必ずや多くの人に読む喜び、聞く喜びを与えるであろうと思われるような話の構成、筋といったものがある。そのような物語は、書き手、話し手にとっても快を与えるものであるに違いない。このように、物語の創出・受容についても、多様な経験の場における判断力の働きについても、快の感情がそれを導くという面があることは非常に重要な点である。

このことは、私たち人間が生身の身体を持つ存在であるということと深く関係する。私たちは、そこに属する感覚器官を通して対象からの刺激をとらえる一方、それを一定のまとまりのある知覚、認識へと変換していくために表象能力（直観、悟性、構想力など）を働かせる。その際、重要なことは、そうした表象能力の運動自体も感覚に影響を与えるという点である。判断力を導くものとして注目される快の感情は、この影響（特に、悟性と構想力の運動の影響）によって生じると考えられる。また、カントによれば、「私は考える」あるいは「私は存在する」といった自己意識も、このような身体とのつながりを持つ感覚を基盤としている。『純粋理性批判』（原著B版1787年）の弁証論に付された注によれば、「私は考える」という命題は、無規定的な経験的直観、すなわち知覚を表現している。それゆえ、「この命題が証示しているのは、もともと感覚が、だから感性に属する感覚がすでにこの実存在の命題の根底に存しているということである」<sup>23</sup>。最近の自我論、人格論の研究書の中には、こうした点に注目し、カントの自我論から身体論へ、そしてリクールが言うような「物語的自己同一性」へと大胆に論を進めるものが見られる（例えば、K. アトキンスの近著<sup>24</sup>）。

さらに、前節で見たように、私たちそれぞれが持つ「私の物語」も、それが記憶のかなたにある乳幼児期から始まることからわかるように、その身体に基盤を有している。神でも天使でもない私たちは、とある男性と交わった、とある女性の母胎から生まれてくるほかはない。いつ、どこで、どのような両親のあいだに、どのような身体的特性をもって生れてくるかは、それこそまったくの偶然である。だが、カントによれば、私たちが自らの起源すらそのように偶然に満ちたものと考えざるを得ないのは、以下のような人間の認識能力の特性による。この引用は、再び『判断力批判』からのものである。

「われわれの悟性は、その認識のうちで、たとえばある産物の原因の認識のうちで、分析的＝普遍的なもの（諸概念）から特殊なもの（与えられた経験的直観）へと進まなければならないという特性をもっている。それゆえこの場合に、われわれの悟性は、(...)判断力に対するこの規定を、経験的直観（対象が自然産物であるとすれば）が概念のもとに包摂されることから期待しなければならない。ところでわれわれは、(...) 総合的＝普遍的なもの（ある全体そのものの直観）から特殊なものへと進む、言い換えれば、全体から諸部分へと進むようなある悟性を思い浮かべることもできる。それゆえ、このような悟性と全体についてのこの悟性の表象とは、(...)諸部分の結合の偶然性を自分のうちに含んではいない。こうした偶然性を必要とするのは、われわれの悟性である。」（強調：原文）<sup>25</sup>

カントはこのように、概念と直観、悟性と感性という二つの源泉から認識を組み立てなければならない私たち人間の認識能力の特性により、様々な物事が偶然的なものとして立ち現われてくるのが余儀なくされていると

考える。これに対し、物事の全体を一挙に把握し、「全体から諸部分へと進む」ことができるような悟性（いわゆる直観的悟性）から見れば、あらゆる出来事、あらゆる事物の存在が偶然ではなくなるかもしれない。このような別種の悟性についての議論は、何らかの神学的前提なしには受け入れがたいものに思われるかもしれない。だが、物語論の視点から言えば、次のような解釈が可能になるように思われる。すなわち、物語の登場人物は、一般的には、普通の人間的悟性を持ち、自分の人生すら容易に見通せず、様々な偶発事に翻弄され続ける存在であろう。他方、その書き手、あるいは語り手は、ある程度その全体を見通し、個々の事件にあらかじめその意義を割当てることができるという意味で、その物語について言えば直観的悟性に近いものを持つ存在であると言える。そして、例えば、「私の物語」の場合、私はその登場人物でもあり、語り手あるいは書き手でもある、といった複雑な事情があるのだと考えられよう。

#### 4. 小括と展望

さて、以上のような検討により、物語論と判断力論が共に拠って立つ地盤は、私たち人間に与えられた「経験という同一の場」であることがより一層明らかになったように思われる。それは、生身の身体を持ち、おそらくはそれゆえに限られた悟性能力した持たない私たち人間が、様々な偶発事に翻弄されながらも、それらを包摂する合目的的な秩序を見出すべく応答を繰り返すような場である。カントが強調するように、私たちはこの「経験という同一の場」において、基本的には有限な悟性の立場で動かざるを得ない。それゆえ、私たちにとって物事が偶然的なものとして立ち現われてくることはやはり避けがたい。しかしまた、私たち人間には、そのような直接的な経験のレベルを超え、この経験の場そのものの作者の視点を私たちが持ちうるかのように考え（批判哲学の視点から言えば、この「かのように」という限定が重要なのだが）、ある種の快の感情に導かれつつ、偶然的なものを包括する新たな秩序を見出そうとする働きが備わっている。そのような働きこそ、カントが反省的判断力と呼んで解明しようとしたものなのであり、また、リクールらによって物語の成立を可能にするものと考えられた当のものなのである。

ここでは最後に、以上のような物語論あるいは判断力論の視点は、倫理学上の普遍主義、共同体主義とどのような関係にあるのかをさしあたり覚書的に考察しておきたい。まず、本稿の問題設定においても若干触れたように、物語論との直接的な親和性を持つのはやはり共同体主義であろう。例えば、A. マッキンタイアは『美徳なき時代』（原著 1981 年）で次のように述べている。

「人間の生の統一性は、物語的な探求 narrative quest の統一性である。探求はときに、失敗し、挫折し、また放棄されたり、気晴らしへと散逸したりする。人間の生はこれらすべての仕方でも失敗することもある。しかし、全体としての人生が成功したか失敗したかの唯一の規準は、物語られたあるいは物語られるべき探求の成功、失敗という規準である。」<sup>26</sup>

マッキンタイアはさらに、人生における「物語的な探求」の目的は「人間にとっての善き生」であるとし、この「善き生」が何であるかは、環境、特にその人がそこで生を受けた共同体（例えば、民族）によって異なると言う。私たちはそのような共同体の過去から、「負債と遺産、正当な期待と責務」といったものを相続しており、「これらは私の人生の所与となり、私の道徳の出発点となっている」<sup>27</sup> というのである。だが、このような主張に対しては、ただちに次のような疑問が生じるだろう。まず、この現代社会において、自分がどのような共同体に属し、どのような伝統を受け継いでいるかを明確に意識している人はどれぐらいいるだろうか。また、そのような帰属意識、あるいは伝統意識に基づき、自分にとっての「善」、あるいは「善き生」が何であるかを明言できる人はどれぐらいいるだろうか。

だが、このような問いかけに対し、次のように答えることは可能だろう。すなわち、そのような帰属意識や伝統意識が失われていることこそ「美徳なき時代」（A. マッキンタイア）の特徴であり、だからこそ、そうしたものを取り戻すべく共同体主義の倫理の重要性を強調していく必要があるのではないか。また、民族のような大きな単位での物語は今ほ措くとしても、「私の物語」、「私の家族の物語」、さらには「私の町の物語」といったものが、実際にさまざまな形で人を支えているのも事実であり、そこに新たな可能性を見出そうとする動きもある。次の引用は、A.W. フランクの『傷ついた物語の語り手』（原著 1995 年）からのものであるが、物語と倫理（特に医



療倫理）の関係を考える上で示唆的である。

「苦しむことは教えることであると見なすことによって、病む人々は行為主体としての力を取り戻す。証言は、専門的知識と並ぶ同等の地位を与えられる。苦しまの教えは、近代医療やこれを支える病人役割などの理論にとってかわるものではない。むしろそこに開かれているのは、病者に対して応答する際に要求される複数の枠組みの間を移動する可能性である。病人役割論は、近代医療批判のための避雷針として役立つばかりではなく、なお多くの説明能力を残している。回復の物語はいまだ最も高い頻度で語られる病いの物語である。（…）」

しかし、時代は変わりつつある。近代医療は、苦しみというものを、根絶されはしないまでも「統制」されるべき難題と見なしてきた。これに対して、脱近代の病いの文化は、一般にもまた医療の内部でも、苦しみを人間の条件の手なづけがたい一部として受け入れる必要を認めている。私は、脱近代を、複数の枠組みが前景から後景へと交互に入れかわっていく時代として理解している。ドナルド・リヴァインは社会理論が「多声的」なものとなることを要求してきた。臨床倫理とケアの概念も多声的なものとならなければならない。」<sup>28</sup>

フランクはここで、近代社会において支配的な「病いの物語」となってきた「回復の物語」に対し、「苦しみの教え」についての代替的な物語（オルタナティブストーリー）が語られるようになったことを肯定的に評価している。このような物語の変化が、少なくともその語り手にとっての「善き生」の位置づけに変化を与えることは事実であろう。また、そのようにして「病む人々」が「行為主体としての力を取り戻す」というのも理解できる。だが、ここであえて次のように問うこともできるだろう。すなわち、このような物語の変化が生じること、あるいはそうなるように働きかけることは、はたして善いことなのだろうか。また、それが善いことであるとすれば、それはどのような意味において善いのだろうか。

ここで問題になるのは、もちろん内容的には、一般的な「回復の物語」に従い、「病人役割」を受け入れていくのか、それとも、「苦しみの教え」についての代替的な物語を採用し、それにふさわしい自己理解を作り上げていくのかの選択である。だが、このような選択を行うにあたり、その理由はどこに求められるかを考えると、そこにはさらに次のような選択肢があることがわかってくる。それは、物語に内在的な理由（例えば、どちらが人生の物語としてまとまりが良く、魅力的であるか）を重視するのか、それとも、物語にとって外在的な、それをいわば超越するような理由（例えば、どちらが人格尊重や最大多数の最大幸福といった倫理原則にかなっているか）を重視するのかという選択である。

もし、物語倫理 narrative ethics の立場を貫くというのであれば、「善き生」の位置づけをある物語の中に見出すだけでなく、どのような物語が語られるべきかという点についても、物語に内在的な理由を採用することになるだろう。例えば、K. アトキンスは、近著 *Narrative Identity and Moral Identity* (2008 年) において、「善き生はある人の人生の統一性と統合性に存するという観念は、人生には倫理的目的があるということの言い換えにすぎない」<sup>29</sup> と主張し、このような立場に立つこと表明している。マッキンタイアの立場も、それが共同体の伝統に即した物語でなければならないという条件がそれに加わることを確認した上で、同様の流れの中にあると見てよいだろう。

だが、悪しき物語が統一性、あるいは統合性を持つということはないだろうか（もちろん、このように問う段階で、「悪しき」という評価の基準は物語の外部に移されている）。例えば、そのような条件を満たし、限りなく美しく、魅力的ではあるが、多くの人々を犠牲にしたり、不幸にしたりするような物語（反カント主義的、反功利主義的物語）といったものは存在しないだろうか。ある種の人々にとっては、ファシズムの物語やレイシズムの物語はそのようなものであった（あるいは、これからもそのようなものであり続ける）可能性があると思われる。もし、私たちがこのような可能性を排除したいのであれば、共同体主義や物語倫理の主張は、その外部から、それなりに普遍性のある観点から理にかなった仕方では制限されなければならないと思われる。そうしたことを一応なしうるのは、一つにはカントの流れをくむ普遍主義の倫理（これにはその影響の下に改訂された現代の功利主義や社会契約説も含まれる）であろう。

とは言え、前稿ですでに明らかにし、本稿の冒頭でも確認したように、普遍主義の倫理は判断力なしには成り立たない。判断力が欠けているとすれば、何が「類似の状況」で、何が「特殊な状況」かが判別できないため、普遍化可能性の原理は機能しないからである。ここで言う類似性、あるいは特殊性は、もちろん物理的観点から見たそれではなく、当面する倫理的課題にとって重要な類似性、あるいは特殊性である。こうしたものについての判断を下すためには、広く共有された世間知、人間知の蓄積とでも言うべきもの（人間的経験の特性記述、カ

ントの人間学講義はおそらくそのようなものとして行われた<sup>30)</sup>が必要だろう。また、再び『判断力批判』に引きつけて言うならば、ある種の快の感情に導かれ、特殊なものの中に新たな秩序を見出していく判断力の働きが、自然探求や美的判断の場においてだけではなく、私たちの経験全般において働かなければ、そうしたものは生み出されないだろう。最後に、このことは、私たちが私たち自身の生について語り、またそれに耳を傾けるといふ地道な営みなしには考えられないことを付け加え、本稿での考察を終えたいと思う。

## 注

- <sup>1</sup> 八幡英幸,「倫理学における判断力の問題(序説):普遍化可能性と特殊性」,『熊本大学教育学部紀要』,人文科学,59巻,2010年,p.142.
- <sup>2</sup> ジャン＝ミシェル・アダン,『物語論:プロップからエーコまで』,末松藩・佐藤正年訳,文庫クセジュ,2004年,p.124-134.
- <sup>3</sup> ジャン＝ミシェル・アダン,上掲書,p.27.
- <sup>4</sup> ジャン＝ミシェル・アダン,上掲書,p.21.
- <sup>5</sup> ジャン＝ミシェル・アダン,上掲書,p.20.
- <sup>6</sup> ジャン＝ミシェル・アダン,上掲書,p.21.
- <sup>7</sup> ジャン＝ミシェル・アダン,上掲書,p.21.
- <sup>8</sup> 貫成人,『歴史の哲学:物語を超えて』,勁草書房,2010年,p.21.
- <sup>9</sup> 貫成人,上掲書,p.25.
- <sup>10</sup> 貫成人,上掲書,p.23-26.
- <sup>11</sup> ベネディクト・アンダーソン,『定本 想像の共同体:ナショナリズムの起源と流行』,白石隆・白石さや訳,書籍工房早山,p.333.
- <sup>12</sup> 竹村初美,「祖先・私・子孫をつなぐピコ(へその緒)の名:現代ハワイ先住民による自己の再帰的プロジェクト」,『死生学研究』,14号,2010年12月,p.24.
- <sup>13</sup> ポール・リクール,『時間と物語Ⅲ:物語られる時間』,久米博訳,新曜社,1990年,p.448.
- <sup>14</sup> ポール・リクール,上掲書,p.452.
- <sup>15</sup> ポール・リクール,『時間と物語Ⅰ:物語と時間性の循環/歴史と物語』,久米博訳,新曜社,1987年,p.120-1.
- <sup>16</sup> 貫成人,上掲書,p.49.
- <sup>17</sup> カント,『判断力批判 上』,牧野英二訳,カント全集8,岩波書店,1999年,p.20.
- <sup>18</sup> カント,上掲書,p.21.
- <sup>19</sup> カント,上掲書,p.26.
- <sup>20</sup> カント,上掲書,p.28.
- <sup>21</sup> カント,上掲書,p.36-7.
- <sup>22</sup> カント,上掲書,p.38.
- <sup>23</sup> カント,『純粹理性批判 中』,有福孝岳訳,カント全集5,岩波書店,2003年,p.117.
- <sup>24</sup> Kim Atkins, *Narrative Identity and Moral Identity: A Practical Perspective*, Routledge, 2008.
- <sup>25</sup> カント,『判断力批判 下』,牧野英二訳,カント全集9,岩波書店,2000年,p.20.
- <sup>26</sup> A. マッキンタイア,『美徳なき時代』,篠崎榮訳,みすず書房,1993年,p.268.
- <sup>27</sup> A. マッキンタイア,上掲書,p.270.
- <sup>28</sup> A. W. フランク,『傷ついた物語の語り手』,鈴木智之訳,ゆみる出版,2002年,p.202.
- <sup>29</sup> Kim Atkins, *ibid.*, p.85.
- <sup>30</sup> cf. 八幡英幸,「人間学:道徳哲学との関係を中心に」,『カントを学ぶ人のために』,世界思想社,近刊.